

高齢者の情報リテラシーに関する研究

中川 凌我

2019年10月1日現在、日本は総人口に占める65歳以上人口の割合である高齢化率が世界で最も高い国である。高齢化については、今後も上昇していくと推計されている。高齢化が進行していく中で、高齢者が抱える社会的問題として、高齢者のネットトラブル増加や情報格差による高齢者の格差、独居高齢者の社会的孤立などが指摘されている。このような社会的問題の要因のひとつとして、高齢者の情報リテラシーの不十分さが考えられる。情報の信頼性や妥当性を自身で判断し、活用することができれば、架空請求などのネットトラブルを避けたり、行政サービスや医療・健康のような自身に必要な情報を収集したりすることが可能である。よって、高齢者の情報リテラシー向上によってこれらの社会的問題が改善できると考えられる。

本研究では、高齢者の情報リテラシーの現状と今後の課題を明らかにするため、質問紙調査を実施した。調査対象者は、全国の65~74歳の男女各50名、75歳以上の男女各50名の計200名である。質問項目は、「情報について」「パソコンの使用について」「スマートフォンやタブレットの使用について」「データについて」の4つの柱を立てた。調査の結果から、高齢者の情報リテラシーの現状について分析し、今後の課題について考察を行った。

調査の結果、普段の情報源として最も使われているのはテレビであること、インターネットを使った情報収集として、ウェブページは6割以上の高齢者に使われているが、SNSは1割程度にしか使われていないこと、情報発信に消極的であること、スマートフォン・タブレットよりもパソコンを使用する傾向にあることなどが明らかになった。

また、質問への回答を基に「情報アクセス得点」「情報評価得点」「情報活用得点」の3つの得点を設定した。さらに、3つの得点を合算して「情報リテラシー得点」を設定した。この得点が「性別」「年齢区分」などの属性によって有意差があるか対応のないt検定を行った。さらに、「情報アクセス得点」「情報評価得点」「情報活用得点」の3つの得点同士の関係を確認するため、相関分析を行った。

t検定の結果、情報アクセス得点は性別、年齢区分によって有意差が見られた。情報評価得点、情報活用得点は、スマホタブレット利用群によって有意差が見られた。そして、3つの得点同士の関係については、それぞれの得点の間に弱い正の相関が見られた。

今回の調査では、高齢者は情報にアクセスする力に比べ、情報を評価する力、活用する力が不足していることが明らかになった。情報を最大限利用するためには、情報にアクセスする力だけでなく、アクセスした情報の信頼性などを評価し、活用する必要がある。そのため、今後高齢者には情報を評価する力、情報を活用する力を身につけていくことが期待される。

(指導教員 呑海沙織)